ゼロの使い魔～二人の使い魔の物語～

双月の剣聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔～二人の使い魔の物語～

【Ｎコード】
Ｎ４２７３Ｍ

【作者名】
双月の剣聖

【あらすじ】
平凡な日常を過ごしてきた少年、双月剣斗。
彼は常に非日常を求めてきた・・・
そして、その願いがかなう時が来るのだった・・・

この物語はゼロの使い魔の二次創作です！オリ主、オリジナル設定が多数出てきます。さらに主人公最強（チート）の設定になっています。
苦手な方は読まないことをオススメします。
それでも良い方は是非、読んでください！！よろしくお願いします

!!!

第０話、「日常の終わり。」（前書き）

初めまして、双月の剣聖と言います。

これはゼロの使い魔の二次創作でオリ主・オリジナルの物語・オリジナル設定が多数登場します。それと、主人公最強チート設定となっています。

なので、苦手な方は読むのをオススメしません。
ですが、それでも良い方は是非、読んでください！！

それでは、物語スタートです！

第0話、「日常の終わり。」

ここは東京のとある小さな町、季節は夏のちょうど真ん中あたりだ、まぁ世間一般で言う夏休みを俺は過ごしている。

俺の名前は双月剣斗（ふたつきけんと）、十七歳、高校三年生だ。

今俺は今日発売するライトノベル、『ゼロの使い魔』を買いにいく途中だ。

・・・ん？オタク？まぁそうなるかもな。アニメも好きだしゲームも好きだ、もちろんライトノベルも。

「・・・はぁ～、それにしても・・・暑い。多分今年の最高気温を更新しただろ、多分。」

ほんとに今日は暑い。確か天気予報では今日は過ごしやすい気温だといってたはずだが・・・

まぁ天気予報を信じた俺のミスってことでいいか。

「それにしても、なんか面白いことないかな～。」

変わらない道、変わらない風景。

俺は昔からそうだ。普通どおりの日常を否定する癖がある。

簡単に言うと俺は非日常を求めているんだ。

例えば、このゼロの使い魔のみたいに、突然道の真ん中に変なゲートが・・・あ、あった。

「・・・おいおい、ほんとにあったよ。・・・って、んなわけないよな～。幻、幻。」

（・・・おぬし、この扉が見えるのか？）

「ん？声？」

突然耳に変なジジイの声が聞こえてきた。どこぞやの大佐の声に似てるな・・・

（どうやら、この少年が・・・そうなのだな。）

「な、なんだよこれ！？幻聴じゃっ、無い！？」

（ふむ、では、早速こっちにつれてくるとするかのう。）

「えっ！？これってなん、う、うわぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・」

そして、俺の意識はそこで途切れてしまった・・・

第0話、「日常の終わり。」（後書き）

次回、剣斗の日常が終わる！？

それでは、次回をお楽しみに。

第一話、「非日常の・・・始まり？」（前書き）

意識を失った剣斗・・・・
これからどうなっていくのか！？

では、本編スタート♪

第一話、「非日常の・・・始まり？」

・・・目が覚めたら、真っ白な空間にいた。
一体どれくらいの時間気を失っていたんだろう・・・
それに、あの声って一体・・・

「おーい、生きとるかー。」

ん？またこの声か。
・・・あれ？今度は幻聴じゃなくてリアルに聞こえる。
それに、目の前に変なジジイが・・・いるな。

「あんた、誰？」

「開口一番がそれか、まぁいいわい。わしは通りすがりのおじさんじゃ。」

「嘘つけ、あんたどっからどう見ても普通の人じゃないだろ。それに、ここどこだよ。あたり一面が真っ白で方向感覚が狂いそうだ・・・」

「ああ、すまんすまん。ちょっとしたギャグじゃ。では改めて、わしは・・・神じゃ。」

「・・・神？え、マジですか？」

ありえねぇ、今目の前にいるこのジジイが神様だなんて、俺は認めないぞ。
・・・あー、でも普通のジジイじゃなさそうなことはわかった気がする。
だって、ここ俺がいる世界じゃないもん。多分、夢かなんかだろ。

「信じてないようじゃのぅ。」

「あーもういいよ。夢なんだから早く覚まさせろ。早くしねぇとしばくぞ？」

「待った待った、ここは現実じゃ。」

「そんなこと言われて信じる人いるか？」

「なら、身をもって信じさせるまでじゃ。」

「あ？」

神？らしいジジイの足元になにやら紋章みたいなものが現れた。
そして俺の頭上から突然雷が落ちてきた。

「え・・・これって、ちょ、ぎゃぁぁぁぁぁ！！！」

「これで信じる気になったか？」

「ぐっ、・・・信じます、信じさせてください。」

「よろしい。」

このジジイ絶対に鬼だ。
間違いない。あの雷はひどすぎる。

「で、その神様とやらが俺に何のようなんだよ。」

「おぬし、普通の生活から抜け出したいようじゃのぅ。」

「まぁな、俺は普通すぎる日常に退屈していたんだ。」

「なら、小説の世界に行ってみたくはないか？」

「は？そんなことができるわけ・・・」

「できるのじゃよ、わしは神だぞ？」

「マジですか・・・？」

どうやらマジのようだ。
あんな雷くらわせておいていまさら嘘なんてなさそうだし・・・

「ど、どこでもいいのか？」

「早速くいついてきおったな。行く世界は自由じゃ。おぬしが決めてよいぞ。」

「本当なんだな？本当に小説の世界にいけるんだな？」

「モチじゃ。」

マジかよ！？
よっしゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！
この話最高だぜぇぇぇぇぇぇ！！！！

「ただし、おぬしが小説の世界に行くということはだ、今おぬしが生活している世界から一度消えなくてはならない。」

「え？それってどういうことだよ。」

「簡単に言えばおぬしは今いる世界から存在を消すと言うことじゃ。」

「別にいいよ。」

ガクッ。
多分、今全世界の人がこけたはずだ。間違いない。

「ぬ、ぬぅ。驚くほどにあっさりじゃのぅ・・・」

「当たり前だろ。俺は今の日常に不満を持ってたんだ。小説の世界にいける？こんな面白そうな話ねぇだろ？」

「・・・そうか、ならば話が早い。じゃあ早速行く世界を決めてもらおうかの。」

「俺は『ゼロの使い魔』の世界に行く。これ、決定ね。」

「ぐぅ・・・またしても即答か。なんて人間じゃ。」

「ところで、このゼロの使い魔の世界に行くに当たってなんか能力とかもらえるの？」

「まぁ一応はあげられるのじゃが・・・」

「？」

「物語りのバランスを壊さない程度の力しか与えられないのじゃが・・・」

「・・・マジ？」

ここまで来て能力制限アリかよーーー！？
普通ここは何でもアリって設定だろ？

「う～ん、じゃあ、とりあえず身体能力は超人レベルまではあり？」

「それは大丈夫じゃ。あと、おぬしが行く『ゼロの使い魔』とは魔

法が出るのではないのか？魔法に関しては無制限で能力付加できるぞ？」

「お、それなら俺の魔力はスクウェアクラス以上にしてくれ。あと、ゼロ魔以外の魔法も自由に使えるようにして。例えばＦＦとかの。」

「かなり欲張りじゃが・・・、まぁよいか。」

「あ、あと詠唱はなしってことで。タイムラグがあるとイライラするから。」

「はいはい。」

「う～ん、あとは・・・あ、あと俺が想像した物を自由に具現化できる能力もいいか？」

「想像したいものにもよるが・・・まぁいいじゃろ。」

「よっしゃあ！」

これでとりあえずは向こう（ゼロの使い魔）では苦労しないな。
あとは・・・俺の武器と・・・容姿も変えたいな。

「あと、俺の武器とか作っても良い？」

「ほんとに欲張りじゃのぅ。」

「気にしない気にしない。武器の系統は・・・とりあえず剣ね。あ

と、俺の魔力を剣に宿せる魔法剣ってことにしといて。あ、インテリジェンスソードって設定もよろしく。」

「了解した。」

「ん？やけにあっさりだな。」

「もうあきらめたんじゃ。」

「あっそ。じゃあ最後に容姿変更ね。」

「どんな風にするんじゃ？」

「え～と・・・じゃあＦＦ７のクラウド（ＡＣ）風に。」

「もとの容姿からかなり離れているのぅ・・・」

「うるせぇ。」

あとは・・・もうないかな。
必要になればあとで増やせばいいか。

「では、今から転送するのじゃが・・・おぬし、使い魔という設定でも良いか？」

「え？ルイズの？」

「いや、オリジナルのキャラじゃ。」

「それは・・・決められないか。」

「当たり前じゃ。おぬしの関係性までは決められん。」

「わかったよ。じゃ、飛ばしていいぞ。」

「心残りは？」

「無い。」

「では、向こうではせいぜい楽しい日常を送るのじゃぞ～。」

俺が返答しようとしたら下に大穴があいた。

「って、転送は穴に落ちるのかよぉぉぉぉぉぉ！？」

「そこはお約束じゃ。」

「ふざけるなぁぁぁぁぁぁ・・・・。」

そして、神様が開いた（はず）の大穴に俺はまっさかさまに落ちていった・・・・

第一話、「非日常の・・・始まり？」（後書き）

チート設定と言ってながら制限をつけてしまいましたが・・・マジですいません。
一応制限するのは宝具などの武器なので極力制限は強くしないよう努力します。

次回は剣斗の設定について書く予定です。
では、次回をお楽しみに！

オリ主紹介

作「今回は前書きはなしということで。」

剣「初めてだな、こうして話すのは。」

作「そうですね～、どうですか？ゼロの使い魔の世界にいけると聞いたときは。」

剣「最高だった。とにかく最高だった。」

作「喜んでもらえるとこちらとしてもうれしいですね。」

剣「まぁ俺の能力が制限されたことには不満があるけどな。」

作「制限といってもゼロ魔の世界だと十分最強・・・というかチートな能力だと思うけど。」

剣「確かにｗｗ」

作「では早速設定の紹介を。」

剣「は！？俺がやんの？」

作「そりゃそうですよ。自分のことなんですから。」

剣「う・・・・自分で自分のことを紹介するってなんか変な気分だな・・・」

作「まぁまぁ、では紹介をどうぞ！」

剣「ぐっ、しょうがない。これが俺の設定だ。」

名前、「双月剣斗（ふたつきけんと）」

性別、男

年齢、１７歳

趣味、読書（主にライトノベル全般。）
家事（超一流。）
トランプでタワーを作ること（多分ギネス級。）

容姿を変える前の特徴、髪は黒に近い茶髪で全体的にツンツンしている。身長は１７６センチでクラスの中でも高いほう。勉強はまぁまぁで、一応大学の進学を希望していた。運動は結構得意で部活ではバスケをやっていた（一応レギュラー）。基本的に明るい性格で誰とでも分け隔てなく接することができている。先生の評価では人付き合いがうまいがかなり鈍いとのこと。

容姿変更後の特徴の変更点、髪が金髪になっている（ＦＦ７のクラウドを想像してください）。基本的にクラウドをイメージしてるが目はあまり鋭い感じではない。ちなみに目の色は薄い青。あと少し身長が縮んでいる（１７３センチくらい）。

武器、名前はクラウド・レイカー。インテリジェンスソードで人格はまんまクラウド。デルフリンガーとは昔から知り合いという設定。形状は刀身が黒いバスターソード。また、銃に変形できる、いわゆるガンブレード。

魔力、スクウェアクラス（本来はそれ以上）。

能力、ゼロの使い魔以外の魔法を自由に使える。
詠唱が無くても強力な魔法を使える。
想像の具現化（リアルイメージ）、想像したことを自由に具現化できる能力。

剣「・・・ＦＦ好きだな、特に７。」

作「ＦＦは最高だと思います。もちろん７が。」

剣「好きにしろ・・・。それにしても想像の具現化って、結構すごい能力だな。でも、ネーミングセンスのかけらもねぇな。」

作「グサっ！！」

剣「それに、剣の名前と人格と俺の容姿、全部クラウドじゃねぇか。

少しはひねりをいれろよ。」

作「グサグサっ！！！」

剣「・・・あ、言い過ぎた？」

作「もういいよ・・・どうせ僕は才能が無いからさ・・・」

剣「才能が無いことは否定しないけど、とりあえず設定については謝る、ごめん。」

作「・・・謝ってもらってるのになんか気分が晴れない・・・」

剣「はは、何でだろうな～？」

作「まぁいいや。では、今回はこの辺で。」

剣「ああそうだ、感想とかあったらたくさんくれよ～、作者が大喜びするから。」

作「あと、剣斗を小説で使いたいと言う人は感想まで。」

剣「多分それは無いな。」

作「ひどい・・・」

剣「それが現実だ。」

作「では、最後にこれを読んでくれた皆様ありがとうございました！また次回をお楽しみに！！」

剣「それにしても・・・俺の主人あたる奴って一体・・・？」

第二話、「始まりの地、その名はハルケギニア。」（前書き）

今回より剣斗の原作ブレイクが始まる！？

では、本編スタート！

第二話、「始まりの地、その名はハルケギニア。」

「ん・・・ここは・・・」

目が覚めると見知らぬ風景画飛び込んできた。
・・・あ、そういや俺ゼロ魔の世界に来たんだった。すっかり忘れてたぜ。
じゃあ今俺の目の前にいるこの・・・銀髪ストレートヘアーの少女が俺の主人かな？
さて、自己紹介自己紹介っと♪

「初めましてだな、俺は双月剣斗だ。よろしくお嬢さん。」

俺はできるだけ笑顔で名前を言った。

「・・・・・」

はて？
無反応って・・・
んん？あそこにいるのは・・・はぁ！？才人！？
つーことは、俺はルイズの後に召喚されたってことか。
この時点でかなり原作変わったな・・・

「あ、あなた・・・平民？」

「おう、俺は平民・・・の設定だ。多分。」

「ミ、ミス・アストラル、これは一体・・・」

アストラル？聞いたことない名前だな。
これがあいつ(神)が言ってたオリジナルキャラってやつか？
それにしても、見た目は完全に禁書目録のインデックスだな。
違う点といえば身長が高くて目が少し鋭いって所かな。

「とりあえず自己紹介しろよ。俺もしたんだから。」

「あ、私は・・・アリア・フレイス・ラ・アストラルです。」

「あ、そう。それと、初めまして、君も使い魔？」

今度は才人に挨拶をした。
使い魔ってことは知ってるけどな。

「え、あ、お、俺は平賀才人。聞くけど・・・あ、あんたって、地球人？」

「ああ、そうだよ。」

「・・・ほ、本当に？」

「本当だよ、何度も言わせるな。」

「う、うおぉぉぉぉ！！！良かったぁぁぁぁぁ！！！」

うわっ！！びっくりした～。
そんなにうれしいか・・・ま、わからなくもないかな。
知らない場所で知ってる人に会えるってすごくうれしいことだよな。
俺も知識が無きゃパニックになってたと思うし。

「ま、とりあえず詳しいことは後だ。・・・さて、アリア、だったな。ここはどこだ？」

「あ、えっと、ここは、トリステイン魔法学院。もっと詳しく言うと、大陸、ハルケギニアのトリステイン王国の中のトリステイン魔法学院よ。」

「詳しい説明ありがとう。じゃ、これで終わりなんだろ？さっさと帰ろうぜ。」

とりあえず何も知らないということをよそおうことはできたかな。
・・・ん？なんか一人こっちに向かって来たぞ？

「おいお前、貴族に対してずいぶんと失礼な態度じゃないか。」

こいつは・・・確かギーシュだな。
・・・って、才人のポジションだろ、これって。

「貴族？同じ人間なんだから別に関係ないだろ？」

「同じ人間？ははは！！面白いことを言うね。確かに僕達は同じ人間だけど、君達平民とは違うのだよ。何せ、僕達は魔法が使えるのだからな！！」

「だから？」

「なっ！？だからとはなんだ！！だからとは！！！」

「はぁ～・・・」

こいつってこんな面倒なやつだったのかよ・・・
呆れた、ナルシストだってのは原作見りゃ誰でもわかると思うけど。
ま、ここは一つ俺がしばいとくか。

「わかったよ。そんなに納得がいかないなら俺と決闘ってのはどうだ？」

「決闘？ははは！君が？僕に？あははは！！」

「いちいちムカつく奴だな・・・怖いのか？このナルシスト野郎！！！」

その瞬間、この場にいた誰もが「確かに」と思っただろうな。
あ、あとギーシュが完全にキレたみたいだ。

「・・・聞き捨てならないな、僕がナルシスト？・・・いいだろう、その決闘受けてやろう。感謝したまえ、貴族が平民と決闘するなんてそうないからね。」

「へ、後で言い訳するなよ？」

「それはこっちの台詞だよ。」

へへ、面白くなってきたな。
俺の能力の確認にもちょうどいいし。
それにうまくすりゃ今後の俺の立場も変わってくるしな。

「アリア、文句は無いな？」

「・・・無い。でも、君ってバカみたいね。。」

「バカかよ・・・ま、いいや。本当に詳しいことは後だからな。」

「うん。」

・・・とりあえず、俺のご主人様はツンデレじゃなさそうだな。
よかったよかった。

さ〜て、ショータイムの始まりだ！！

「・・・さて、はじめるか。」

「いいだろう。」

・・・俺とギーシュの戦いが始まった。

続く。

第二話、「始まりの地、その名はハルケギニア。」（後書き）

剣「ここできるか・・・普通？」

作「・・・すいません。」

剣「まぁいいか。そういえば感想来てた見たいだけど。」

作「はい！確かに来ました！マジで感謝です！！」

剣「ちゃんとお礼言っとけよ？」

作「では、魔神三十二号様、感想ありがとうございました！！」

剣「さて、ギーシュか、余裕だな。」

作「そうですね。」

剣「あ、そういえば結構詳しいこと先延ばしにしたけどいいのか？」

作「そこは大丈夫だと思う。次回はギーシュを瞬殺する予定だから。」

剣「ネタバレ・・・」

作「あとこの会話にもう一人加わると思うよ。」

剣「マジ？誰だよ。」

作「それはお楽しみ。」

剣「・・・死ね。」

作「嫌だ。」

剣「・・・じゃあ、次回予告。」

作「次回は剣斗ＶＳギーシュ、の予定です。」

剣「人気出るといいな。」

作「そうですね、最後に、これを読んでくれた皆様ありがとうございました！次回をお楽しみに！！」

剣「ギーシュ、ちゃんと負けたときの言い訳考えてろよ・・・」

第三話、「主人選びはご計画にｗｗ」（前書き）

少し更新予定が遅れてしまいました、すいません。
今回は剣斗の実力が明らかになる！？
では、本編スタート♪

第三話、「主人選びはご計画にｗｗ」

「ふふふ、君、僕の二つ名を教えてやろう。」

「あ？二つ名？」

知ってるつーの、『青銅』だろ？
ま、俺が知ってるなんて向こうは思いもしないだろうけどな。

「そうだ、僕の二つ名は『青銅』、いでよ！僕の戦乙女（ワルキューレ）達よ！！！」

ギーシュの言葉に続き六体のワルキューレが練成し召喚された。

「ヒュ～、生で見ると結構すごいな。さて、俺もいくか、こいクラウド。」

剣斗の右手に一振りの剣が現れた。

「・・・初めましてだな、剣斗。」

「おう、クラウド、早速だけど戦闘だ。」

「ふ、問題無い。」

こいつの名はクラウド・レイカー、インテリジェンスソードだ。
見た目はＦＦ７でクラウドが使ってるバスターソードと同じ、だから名前がクラウドなんだけどな。
刀身は黒だ。特に意味は無いけどそのまんまは悪い気がして・・・

「なぁクラウド・・・」

「なんだ？」

「俺って生まれてこの方剣握ったことも無いけど大丈夫なのか？」

「問題ない、ここに来る際に神がお前に力を付加しておいたらしい。
実力はかなりのことだと聞いている。」

「ほ、なら良かった。」

ふぅ、これで不安は全部消えたな。
・・・よし、これより目の前にいるナルシスト小僧を抹殺する・・・
なんてなｗｗ

「何を話してるんだ？君は。」

「え！？ああ、気にすんな。こっちの話だから。」

「なら、始めようじゃないか。」

「言われなくともっ！！」

ダンッ！！

俺は地面をけり一気にギーシュのワルキューレ達に近づいた。

「なっ！？早いっ！？こ、攻撃だ！！」

「へ、遅すぎるぜ！！」

ワルキューレが攻撃を始める前に俺は剣を振っていた。

そして・・・

「はぁぁぁぁぁっ！！！」

ザンッ、ギンッ、ズバァッ！！！

一気に三体のワルキューレを切り裂いた。

「なっ！？僕のワルキューレがっ！」

「ちっ、三体残ったか、ならっ！！」

一度止まり俺は空へと跳んだ。

「今度はこいつだ！！」

俺の足元に魔方陣が現れた。

色は黒。・・・これって、あ神いつがつけたんだよな・・・？

「大いなる雷よ・・・サンダガ！！！」

・・・バチバチ、ズガガァァァァァァァァン！！！！！！！！

残りのワルキューレ全てにサンダガが命中した。

「ぼ、僕のワルキューレ達がっ！！」

チャキ・・・

驚くギーシュの後ろから俺はクラウドを突きつけた。

「チェックメイトだ、ギーシュ。」

「・・・僕の、負けだ。」

「ふぅ、楽勝だな。」

「う・・・うそ、平民がギーシュに勝った・・・」

「さて、戻るとしますか。お～い、アリアさーん、おわりましtグボァ！？」

「あんた・・・何やってるのよこのバカァ！！！」

「はい？」

え・・？なんで？
どうして俺を殴る？それも腹ばっか？
ねぇ、どうして？なんで？

「はぁ～、アンタわかってるの？」

「げほっ、げほっ・・・な、何がだよ？」

「アンタは私の使い魔のなのよ？なに勝手なことしてるのよ。」

「え～と、俺にはなにやらさっぱりと・・・」

「あ～もういい！来なさい！！ルイズ！アンタも来て！！」」

「あ、う、うん。」

お、おいおい・・・俺のご主人様って、こんな性格なの？
ツンデレ・・・では無いことを祈るけど・・・とりあえずルイズ二号だな、多分。
・・・はぁ～うらむぜ、神様ぁ・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

場所は変わってトリスティン魔法学校のアリアの部屋。
俺はアリアに拉致？されて今才人と共に話をしている。
一応俺と才人が地球から来たってことを今説明している。当然信じている様子じゃないけど・・・

「・・・で、アンタ達はその地球っていう世界からこの世界に召喚されたって言いたいのね。」
「ああそうだよ、証拠が見たいならいくらでも見せてやるよ。なぁ才人？」
「おうよ！！」
「はぁ～、とりあえずアンタ達が異世界から来たってことは認めるわ。」

「ならもういいだろ。」

「ええ、ルイズの使い魔君はもういいわよ。」

話を聞くところアリアとルイズは昔からの親友らしい。
ルイズはともかく何で自分が平民をとアリアはマジギレしている。
理由はアリアの魔法の系統にある。彼女の系統は四系統どれにも属さず虚無でもないという。彼女自身は『星』といってるが原作を見る以上星なんて系統は出てこないはずだ。
それなのに彼女の魔法は星・・・やっぱり俺が来たことで原作の設定が変わっているのかな？

「ところでアリア、お前の星魔法って本当なのか？」

「ええそうよ。私の魔法は特別らしいのよ。それなのになんでアンタが。」

「そうか・・・」

「何よ？」

「いや、じゃあ才人とルイズを部屋に返してくれ。・・・あ、あとルイズ。」

「何？」

「お前はゼロなんかじゃない、・・・これだけだ。」

「え・・？」

「なに言ってるのよ、じゃあねルイズ。そっちもがんばってね。」

「え、ええ、ありがとう、じゃあ。」

そう言って二人は部屋を出た。
ふぅ、・・・アリアには全部話か。
この世界と俺のことを・・・

「さて、アリア・・・二人もいなくなったことだし、本当のことを話すか。」

「はぁ？本当のことって・・？」

「俺は、一度死んでるんだ。」

「え？」

「俺はこの世界の人間じゃない。異世界人だ。」

「それはさっき・・」

「でも、俺の存在はもとの世界にはもう無い。」

「どういうこと？」

「命と引き換えにこっちの世界に来たってことだよ。」

「・・・そう・・なんだ。」

「別にお前が気を落とすことじゃないよ。俺が望んでやったことなんだから。」

「・・・」

「さて、こっからが本題だ。この世界は、俺の世界では物語、小説の中のことなんだ。」

「!?」

「つまり、俺はこの世界の未来が全部わかるんだ。もちろん、なんでルイズが才人を召喚したのかもな。」

「う、うそよ!!」

「本当だ、ルイズは・・・」

言っていいのか?

例え俺の主人でも、この先のことを教えるってことは・・・

「剣斗・・・」

「ん?」

「話して・・・・」

「！？、・・・わかったよ。ルイズは、虚無なんだ。」

「ルイズが・・・・虚無？」

「そして、才人は伝説の使い魔、ガンダールヴなんだ。」

「そんな・・・うそよ・・・・」

「そして、アリア・・・お前は、俺がこの世界に来たことでうまれた存在なんだ。」

「！？」

「これが・・・真実だ。」

「あ・・・わ・・私が・・・、本当は存在しない・・？そんなの・・・・」

「一度に言って整理がつかないよな・・・・」

「・・・・わかった。」

「え・・・・？」

「信じるよ、剣斗のこと。」

「アリア・・・・」

「そうよ、例えアンタが異世界の人間でも、私が本当は存在しない人間でも、アンタは私の使い魔で、私はご主人様なんだから。」

「・・・ああ、そうだよな。そうだよな！」

「でも、使い魔としての扱いはするわよ？」

「・・・マジすか？」

「ええ。」

・・・でも、まぁいいか。
アリアが納得してくれて。これで俺も思う存分この世界で生活できるな。
でも、やっぱアリアの性格・・・どうにか何ねぇかな・・・？

・・・こうして、剣斗とアリアは晴れて主人と使い魔という関係を作ることができた。
しかし、これはまだ始まりに過ぎない。
これから、剣斗が知らない出来事が沢山起こるのだから・・・
そう、まだ物語りは始まったばかりなのだ・・・

続く。

第三話、「主人選びはご計画にｗｗ」（後書き）

作「結構シリアスな雰囲気になっちゃたな～。」

剣「そうだな、でも、次からまた原作どおりに進めていくんだろ？」

作「まぁ・・そうですけど。」

剣「ん？どうかしたか？」

作「いや、何でもない。では、前回予告したとおりこの会話に加わるもう一人のメンバーを紹介します。」

剣「・・・なんとなくだが予想がついてきた。」

作「では、どうぞ！！」

アリア「こんにちは、アリア・フレイス・ラ・アストラルです、よろしくお願いします！」

剣「やっぱし・・・」

ア「やっぱしって何よやっぱしって！！」

剣「いや・・・」

作「まぁまぁ喧嘩はそこまでにして、改めてようこそアリアさん！」

ア「ありがと、作者さん。」

剣「別にそこまで礼儀正しくしなくていいぞ、こいつはヘボ作者だからな。」

作「ヒドイ！！」

ア「確かにヘボイけどね。」

作「ガーン・・・」

剣「あ、落ち込んだ。」

ア「ほっときなさい。」

剣「いいのか？」

ア「すぐ立ち直るわよ。じゃ、剣斗かわりに次回予告して。」

剣「へいへい、次回はデルフ登場だな。」

ア「あ～才人君の剣ね。」

剣「ああそうだ・・・って、なんでお前原作知ってるの！？」

ア「え？さっき作者さんに本貰って、私速読だからもう１０巻まで読んじゃった。」

剣「あーそうなの。さて、最後に、これを読んでくれた皆様ありがとうございました！」

ア「感想とかあったら沢山くださいね！」

剣「それじゃ。」

剣&アリア「次回をお楽しみに！」

第四話：「トリスティインの武器屋？え？あそこってインチキ商売だよね？」（前

え～、約2週間ぶりの更新となってしまいました。
すいません・・・

えっと、今回は才人の相棒デルフリンガーの登場です。
はたして、どのように剣斗とアリアが絡むのか？

では、本編スタート♪

第四話：「トリステインの武器屋？え？あそこってインチキ商売だよね？」

ここはトリステインの城下町。
現在俺はアリアとルイズ、そして才人と共にそこを歩いている。
魔法学院から馬を使って門まで行き、門のそばの駅に預けてここまで歩いてきた。
さっきから才人が、「腰がいてぇ」とぼやいている。
ま、そこは原作どおりだな。

「情けない、馬にも乗ったこと無いなんて、これだから平民は。」

「俺も一応平民だが、どこも痛くは無いぞ？」

「ケントは別よ。」

「はぁ？何でだよ！！」

「うるさい、少しは黙ってなさいよ。」

ドンマイ才人、俺にはどうにもできん。
さて、何故俺達が街を歩いているかというと、原作を知っている人は分かると思うけど一応説明しておく。
それは昨日の夜にさかのぼる。
ルイズが才人に剣を買うってことになってルイズの親友アリアとその使い魔の俺がついて行く事になったってわけだ。
まぁ結構要約したけどこれが理由だ。

「剣斗、誰と話してるの？」
「ん？さぁ、誰でしょう？」
「はぁ？意味わかんない。」

ん？俺が説明しているうちに武器やに着いたみたいだな。
ここのインチキ店主結構うざいよな。

「旦那、貴族の旦那。うちはまっとうな商売してまさぁ。お上に目をつけられるようなことなんか、これっぽちもありませんや。」
「客よ。」
「こりゃおったまげた、二人も貴族が剣を！おったまげた！」

何がまっとうな商売だよ。
才人になまくら売りつけようとしたくせによぉ。
いっそのことここファイガで燃やしてやろうかな、こいつ見てると腹立ってくる。

「どうして？」
「いえ、若奥さま。坊主は聖具をふる、兵隊は剣をふる、貴族は杖

をふる、そして陛下はバルコニーから手をおふりになる、と相場は決まっておりますんで。」

「使うのは私じゃないわ。使い魔よ。」

「そちらも？」

「いえ、違います。」

「俺はもう剣は持ってる。」

そう言って俺はクラウドを店主に見せた。

「はぁ～こりゃ・・・ですが、うちの剣のほうがいいですぜ。ちょっと見て行ってくだせぇ。」

「ああ？クラウドよりもいい剣がある？ふざけんな、この店燃やされてぇか！？」

「ひ、ひぃぃ、すいません。」

「ちょっと、剣斗！！」

「ちっ、分かったよ。」

マジで頭くるなこのジジイ。
クラウドを馬鹿にしやがって。

まぁいい。さっさと才人にデルフを買ってもらって帰るとするか。

「おーい、デルフリンガー！いるかー？」

「剣斗、何してんだ？」

「おお？俺が分かるのか？小僧。」

「お、いたいた。初めましてだな、俺は双月剣斗。こいつはクラウドだ。」

「！？、・・・おい、クラウドか？」

「デルフ？デルフか！」

「へ？」

クラウド？デルフ？何言ってんだ？

「いやぁ～久しぶりじゃねぇかクラウドぉ！何年ぶりだ？」

「ふ、本当に変わらないな、デルフ。」

「なにこれ・・・インテリジェンスソード？」

「お、そうだ。才人、こいつを買え。」

「ええ～、やだよこんなボロいの。」
「ああ？おい、小僧！！今なんって言った！？」
「ボロいもんにボロいって言って何が悪いんだよ！！」
「上等だこの、てめぇ、名前なんだ！？」
「俺は平賀才人だ。」
「ん・・・？おでれーた、お前『使い手か』か。」
「そうだぜデルフ、この才人がそうなんだ。」
「へぇ～、見損なってたわ、てめ、俺を買え。」
「はぁ？なんで「いいから買っとけ。」ええ！？剣斗まで！？」
「おい、店主。この剣ってあんたの店の厄介者なんだよな？」
「ええ、まったくっでさぁ、こいつのおかげで。」

よし、食いついてきたな。
俺の計画通りに行けばデルフをただで手に入れられるぞ。

「なら、こいつをただで譲ってくれないか？」
「ただで？喜んでいいでさぁ。」

「よし、んじゃ、才人、デルフをもって帰るぞ。」

「え、あ、おう。」

そう言って俺達は店を出た。
ラッキーだな、本来なら新金貨１００のところをだったけど、ただで手に入ったぜ。
いや～ラッキーラッキー。

「剣斗。」

「ん？」

「あんまり物語りに口挟まないほうがいいんじゃないの？」

「・・・まぁ、それもそうだけど。」

ちなみにこの世界が物語りだってことはアリアも知っている。
俺の想像の具現化で原作本全巻出して読ませたから今のアリアはほぼ俺と同じくらい原作知識があるってことになる。

「あ、そうだ。なぁクラウド。」

（なんだ？）

「どうしてデルフのこと知ってんだ？」

（そのことか、あいつとは昔の戦友だ。）

「はぁ～、ほんとに俺が来たことで色々変わってるなぁ、おい。」

デルフに戦友ねぇ。
結構面白いじゃねぇか、楽しくなってきたぜ。

・・・尚、その後ゲルマニアの何とかが鍛えたっていう剣はしっかりキュルケに買われたとさ。

続く。

第四話：「トリスティインの武器屋？え？あそこってインチキ商売だよね？」（後

作「久々の更新だー！！」

剣「まったく、2週間ってどんだけだよ。」

作「いや～、まぁ色々あってね。」

剣「あっそ。はぁ、それにしてもクラウドとデルフが知り合いなんて驚いたなぁ。」

作「そうですね。」

ア「確かに、デルフリンガーさんがね・・・」

剣「あ、アリア居たんだ。」

ア「なっ！？いたわよさっきから！！」

作「まぁまぁ二人とも。」

剣「ふぅ、さてと。次回はどうなんだ？作者さんよ。」

作「次回は土くれの登場でーす。」

ア「あー、あの人のやつね。私あれ読んだときものすごい驚いちゃって。」

剣「そうか？俺は読めてたぞ。」

作「ま、二人の話はここまでにして、今回はここまで！」

ア「あ、感想とかあったらいっぱいくださいね☆」

剣「誤字脱字などの指摘も頼むぞ。」

作「最後に、これを読んでくれた皆様ありがとうございました！」

作&剣斗&アリア「それでは、次回をお楽しみに！！！」

アクセス感謝と悲しいお知らせ

作者「今回はアクセス感謝というタイトルですが……」

剣斗「おい、悲しいお知らせとはなんだ？悲しいお知らせとは。」

作者「実は……、やっぱ後にします。」

剣斗「おい！！」

作者「えー、ということでアクセス感謝ですが、１８，５００アクセスとなってますね。」

剣斗「こんな駄作が！？」

作者「はい、僕もかなり驚いてます。」

剣斗「つーか、多いの？これ。」

作者「知りませんよ。」

剣斗「ま、これより多い人なんて沢山いるだろ。」

作者「そうですよ。」

剣斗「なぁ、さっきからテンション低いな。どうしたんだよ。」

作者「え～と、実はですね……」

剣斗「？」

作者「実は、今回でこの小説を半年ばかり休載しようと思って……」

剣斗「は？今なんて言った？」

作者「この小説を休載するって言ったんです。」

剣斗「何で！？」

作者「実は僕は受験生の身でこれを書いてたんです。」

剣斗「受験生って。」

作者「最近勉強にまったく集中できなくて。」

剣斗「そのために休載か。」

作者「本当に勝手なことだと思うのですが……」

剣斗「まったくだ。」

作者「すいません……」

剣斗「で、いつ復活できんだ？」

作者「受験が終わるころ……ですかね。」

剣斗「そうか……」

作者「では、今回はこの辺で。」

剣斗「・・・」

作者「最後に、必ずまた更新します。なので待っていてください。
今回は本当にすいませんでした。」

次回は、来年の3月になってしまうと思いますが、できれば見捨てないで欲しいです。
本当にすいませんでした。
では、来年の3月にまた……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4273m/

ゼロの使い魔〜二人の使い魔の物語〜

2010年10月17日04時59分発行